

医史学と私

守屋 正

日本医史学雑誌第三十三卷第四号
昭和六十二年十月三十日発行

「医史学と私」ということであるが、私が医史学を本格的にやり出したのはそう遠いことではない。しかし学生時代(昭和十年京大卒)から興味は持っていた。先輩の巴陵宣祐氏(大正十五年京大卒)の本には大いに啓発されて愛読し、富永孟氏(大正三年京大卒)の『世界医学史』を学生時代から持っていた。これは学生時代に外科の鳥瀉教授が講義の合間にちよいちよい医史学のことを話され、学生時代から師事した倉敷中央病院内科医長松原良一先生(大正六年京大卒)が、ラエンネックやアウエンブルッガーやヴンデルリッヒの話をされたことに大いに興味を持ったからである。昭和十二年十月に召集され、この時は一時帰休し、翌十三年六月に応召、十七年十二月迄中国戦線に引張られたので、医史学とは全く無縁だったが、その間に中国語を先生について習得したことは後世のプラスになった。昭和十八年一月から十九年八月迄京大の病理学教室に在籍し(病理学と内科の大学院には昭和十一年から入学し、研究は一応完成していた)、附属医専の講師をしていた。この間に富士川游先生の『日本医学史』、小川政修先生の『西洋医学史』を購入し、その他医史的な逸話のような本は一応目に付いたものは入手した。富士川先生の『医術と宗教』もその頃愛読した。

こんなわけで医史学への興味は学生時代から持っていたと申してよいが、指導者もなく、特に必要もなかったので、その後医史学とは縁切りとなった。

その後昭和十九年八月から終戦迄フィリピン戦に参加し、生存者二%の中に辛くも入って、終戦後から昭和二十一年八

月迄日本軍の捕虜のために開設された米軍第一七四站病院に勤務した。病理学専攻だったので、ラボラトリー勤務で、顕微鏡相手の毎日であった。帰国後大学を辞し、内科を京都市内で開業した。

私はもともと旧制高校（六高）時代から、美術史が好きで、医史学よりこの方に熱中した。これは小学校時代（大正十年頃）から親戚の倉敷の大原孫三郎が西洋の画をどしどし購入し、息子の総一郎とは同年で、竹馬の友であったので、大原家所蔵の画（フランスの印象派が主であったが、グレコやセガンチーニもあった）に深く親しみ、中学の終り頃から画家の伝記などを読んで、歴史の面白さを知った。これが後年医史学には役に立った。通史を知ることが第一としたからである。

私の美術史は結局は中国美術史、特に中国絵画史が興味の中心となり、中国絵画（特に明清時代の文人画）のコレクションに精力を集中し、内外の中国美術専門家と交流するようになった。中国語が話せたのが利点であった。

医史学との関係はその後である。昭和五十年四月に京都で第十九回日本医学会総会があり、阿知波五郎先生が日本医史学会会長の予定であったが、病気のため辞退され、大阪の中野操先生が会長となられ、大阪で医史学会総会が開かれることになった。この時太田典礼先生の大喝が京都府医師会に落ちた。

「京都は何をばやばやしとる。京都は医史学の宝庫ではないか。それをぼんやりして、大阪に医史学の学会をとられるのを恥と思わないのか。京都にある医史学の資料を集めて、医学会総会の会期中、医史学資料展をやれ」というのである。

これは誠的を射た忠告であった。昭和十八年九月頃、私は眩暈症で京大耳鼻科に入院していた。ある日突然、府医師会長、学術担当理事、府医師会事務局長が病室に見舞に来た。「これはこれはお揃いでお見舞とは恐縮の至り」と申したら、これがとんだお見舞であった。

来年四月の医学会総会の時に府立総合資料館で一週間「京都の医学史展」の開催が理事会で決定したから、実行委員長をやってくれというお見舞であった。

「馬鹿たれ、わしが眩暈で入院しとるのがわからんのか、第一わしは医史学のことは何もわからん、阿呆なことを言うな」と烈火の如く叱り飛ばした。所が敵もさるもの、仲々帰らない。君は学術委員長ではないか、こんな仕事は学術委員長がやるのが当然と理事会の決定だと言う。押問答の末、山田重正先生（後年の『京都の医学史』の三分の二の執筆者で、多年の医史学資料、殊に医家の書簡、墨跡のコレクションは有名）と宗田一先生（こんな偉い人が京都に居られるとは知らなかった）が全面的に応援すると言って居られるからと、とうとう多勢に無勢で押し切られてしまった。こうしてニワカ医史学者が強制的に産まれた次第である。

「京都の医学史展」は事実上、宗田先生と山田先生と坂上俊之氏（京都府医師会事務局員、同志社大学卒、日本医史学会会員）の三人が主になって資料蒐集と目録作りに献身的に活躍されたと申してよい。有名な阿知波先生は病弱であり、性格的に極めて謙虚で、脱俗的存在だったので、この展覧会の顧問的役割をされ、所蔵品はいろいろ出品して頂いたが実働は殆んどされなかった。宗田先生と山田先生と坂上氏の大活躍により、京都や滋賀の医家の旧家（小石、百々、山本、三宅、伊良子家等々）、仁和寺、大往寺などの名刹、京大文学部の所蔵品及び医学部所蔵の富士川文庫などをリストアップし、その借与をお願いした。山田先生の所蔵品は六十点位墨跡を出品して貰い、小石家の膨大な所蔵品が中核となった。また宗田先生は最高顧問として所蔵品を多数出品して下さった。私も一カ月ほどで退院したので、仁和寺へ国宝の『医心方』五帖や『黄帝内経明堂』二巻を拝借に参上した。この国宝の出品は医師で僧侶の阿部野竜正先生（当時府医副会長、現高野山管長）のお骨折があった。阿知波先生の所蔵品特に「浅沼佐盈画、山脇東洋撰文」の「蔵志図」の大幅は庄巻であった。

こうして昼夜兼行で、展覧会の準備と目録作りに奮闘した。陳列には一週間位かかった。狭いケースの中に入って中腰で飾り付けをする苦労はやったものでないとわからない。私はニワカ勉強を泥縄式にやらされ、ヘンテコ医史学者が急造されることになった。展覧会は想像以上に大成功で、伊良子家所蔵の他見不詳の孝明天皇毒殺の文書などを新聞が大々的

に報道したため、二千四百名の多数の観衆が来て、湯川秀樹氏など有名人を一カドの専門家顔をして（内心可笑かったが）案内をし、武見太郎先生もわざわざこの展覧会のためのみに来洛された。その時私を医史学の専門家と誤認され、その年の秋東京での第二十九世界医師会東京総会記念のメインイベントとして「日本の医学史資料展」の実行委員の一人にされる原因となった。この時の武見先生委嘱の実行委員は四名で、小川鼎三、大島蘭三郎の大先生と梅沢信二氏（会場主）と私であった。最高権威者の中にショボンとチンピラが入られ、結局は宗田先生の全面的ご協力により、うまく責任を果した。宗田先生は私ばかりでなく、京都府医師会にとっての大恩人である。

この京都の医学史展の成功により、京都府医師会が全国でも有数の医史学研究の中心的存在となった。その前にも一つ面白いエピソードがある。それはこの展覧会の慰労会を京都府医師会が新宮涼庭旧邸の「順正書院」（料亭順正）で開催した時のことである。順正書院の上段の間には、小川鼎三、中野操、宗田一の大先生と大号令の太田典礼先生が坐り、下座には夫々実行委員が並んだ。阿知波先生はご遠慮されて下座の方に坐られた。この時太田先生の大喝に次ぐ大忠告が小川先生からあった。温厚な小川先生は一応この展覧会の労を賞されて、「一つ私にはかねてからの希望がある。それは山脇東洋の覬臚の地に何一つ記念の碑がないので是非この際、覬臚記念碑を建立していただきたい」と言われた。全く以てご立派な提言であり、ご忠告である。

早速京都府医師会内に「山脇東洋顕彰委員会」が設置され、またまた私とその実行委員長にされてしまった。また猛烈な泥縄勉強である。調べると、山脇東洋覬臚の地は六角通大宮西入の旧六角獄舎の庁前となっている。大学同窓の西村秀雄教授（京大解剖学）が数年前その場所を発見して論文を書いている。早速現地に行ってみると、財団法人京都感化保護院の敷地内である。ここは刑余者の収容施設で、幕末に横殺された平野国臣らの殉死の碑が建っている。感化保護院案内書を貰って驚いた。理事長は旧知昵懇の弁護士熊谷康治郎氏である。熊谷氏は有名な刑法史学者で、殊に幕末史と祇園の歴史（若い時は相当遊んだらしい）の権威者であり、幕末史の資料コレクターとしても高名である。

実は建碑の実行委員長は引受けはしたものの、建碑をする場所の土地問題があった。これが一番頭痛の種であった。その晩、早速熊谷氏に電話して、「山脇東洋の碑を建てたいのだが、感化保護院の土地を借して下さい」と言ったところ、「守屋さん、何を今頃そんなことを言うのか、私は京都府医師会が山脇東洋の碑をもう建てるか、もう建てるかと待っていたのだ。無論異存はない、喜んで場所を無償で提供しよう」と言うことになった。これで第一の大難関はめでたく落着いた。次は主催団体の承諾である。大阪の日本医史学会総会へ出席し、中野会長に主催団体の承諾を総会で計って頂き、満場一致で承認された。日本解剖学会は西村教授に、日本医師会は武見会長にと承諾して貰った。これで全てお膳立が出来、次は募金活動と碑の設計である。建立、除幕の期日は翌五十一年三月七日（屈嘉の命日）と決定した。

碑の設計は私が担当し、文字は中央の「山脇東洋覬臆之地」は『蔵志』から一文字宛を蒐め、拡大し、碑前壁の説明文等は全て宗田先生が名文で作って下さった。同時に誓願寺にある「山脇東洋夫妻の墓」と有名な「解剖供養碑」も保存修理することとし、墓には上屋を作り、説明文を宗田先生に顕彰会の名で作って頂き、墓地の隅にあった解剖供養碑を墓の南側に移し整備した。

募金は予想以上に集まった。私が武見先生にお願いしたところ、日本医師会から直ちに三十万円寄贈の申出があった。石は瀬戸内海の大島の花崗岩を用い、設工は全て大徳寺東門前の藤原庭石店に注文した。

期日通りに碑は竣工し、昭和五十一年三月七日に山脇家後裔の山脇洋二氏（東京芸大教授）の令孫により除幕され、祝賀会は京都府医師会館で挙行し、特別講演を医史学は小川先生に、六角獄舎に関する刑法史は熊谷氏がして下さい。これで小川先生のご熱望も達成されてほっとした。

所がたまたま次に大きな問題が起きた。それは折角「京都の医学史展」で資料も蒐め、目録も作り、委員たちも仲好しになって、意志が疎通したのだから、ここで『京都の医学史』の編纂をしようということになった。これは大仕事である。この中心は、阿知波五郎、山田重正、宗田一の三先生である。好機逸す勿れと全く息をつぐ間もない。

この『京都の医学史』の編纂に関しては、他の人が書くかと思うので、略記するに止めるが、総企画は宗田先生が中心であった。時代別、年代別、各科別に夫々に私も入れて十二人の執筆者が分担した。阿知波、山田両先生が中心なのは勿論である。阿知波先生は病身をおして大奮闘して下さった。今や両先生とも他界されたが、両先生が居られなかったら、この大著述（資料篇共で二〇七四ページ、五年掛りの大事業、毎日新聞出版文化特別賞を思文閣出版は受賞した）は絶対実現していない。よい時によい企画をし、実行したものとつくづく思っている。この執筆はプロフェッサーにテーマを貰うのと同じで、病弱な阿知波先生のご依頼により、若い委員が夫々分担執筆した。このことは若い医史学者の養成にも大きく貢献した。

もう一つのプラスは「京都の医学史展」により、医史学の興味が京都府医師会員の中に起きたことである。京都は戦災もなく、医家の旧家も多いので、次々と資料が医師会に持ち込まれた。北小路家の「安芸守定像」、「御産所日記」の発見などはこの大きな成果の一つで、『京都の医学史』にはこれを収録することができた。

私はもともとその才もないので執筆はせず、監督のような役目で、ぶらぶらしていたら、阿知波先生から、「安土、桃山時代の医学」を執筆せよとのご命令（ほんとはご依頼）があった。但し曲直瀬道三は阿知波先生が書かれ、私はキリスト教関係のところである。またまた俄か勉強である。それまでに阿知波先生のお宅には何度も伺って居り、極めて昵懇だったので、先生も頼みやすかったらしい。いろいろの文献や資料を借して下さった。私は美術史研究のためと医史学の興味から戦時中に、関衛著『西域南蛮美術東漸史』、古賀十二郎著『西洋美術伝来史』、レオン・パジェス著『日本切支丹宗門史』（三巻、岩波文庫）などを読んでいたので、このテーマは興味もあり、書きやすかった。

早速海老沢有道、片岡弥吉、岡村千曳氏等の本を読み、フロイスの『日本史』も一通り揃えて、百ページばかりを書いて責任を果たした。もともと東西文化の交流の問題は好きで、無宗教ではあるが、キリスト教、仏教、道教史などはその交流と影響に関心があった。ところがある日突然スペイン人のカトリックの神父さんの来訪を受けた。この神父さんは京都

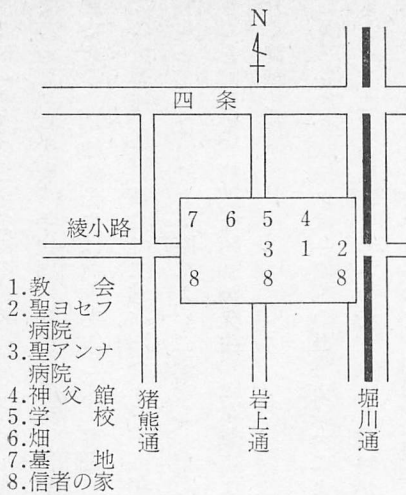


図1 妙満寺跡に建てられたフランシスコ会の教会・病院・学校などの見取図(1594~1597)。J.L. Alvarez Taladriz 氏の著書による

産業大学の教授(スペイン語とスペイン史)で、日本に帰化されている人であるが、ある医師の紹介(私が医史学をやっていると言つて)で、京都は二十六聖人発祥の地なのに、長崎には殉教碑があるのに、京都には何の記念の印もないので、それを建てたいという。こうなるとまるで「神のたすけ」である。その神父さんに二十六聖人のことをきくと、私が書いていた史実は大分間違っていた。大阪に居るスペイン人の神父さん(J.L. Alvarez Taladriz 氏)の最近の研究をいろいろ教えて貰つて、またこの建碑事業を引受けてしまった。しかしこれは全く天の助けというか、よい時によい人が現われたものである。『京都の医学史』にも「妙満寺跡に建てられたフランシスコ教会、病院、学校などの見取図(一五九四~一五九七)(図1)をその二〇二ページに載せることが出来、殊に桃山文化に大きな影響を与えた碩学カルロ・スピノラの事跡を詳しく追求できた。この碑は昭和五十四年七月十四日にスペイン大使、京都のカトリック司教、前記のスペイン人の神父さんなど大勢の列席のもとに、私が除幕した。勿論場所の交渉から碑文、設計、施工の監督など一切私がした。

こうして奇妙なことで即席且つヘンテコな医史学者が誕生し、日本医史学会や蘭学資料研究会にも演題を出すようになった。そして遂に札幌での第八十二回日本医史学会総会で日本医史学会評議員に宗田先生のご尽力で推薦され、昭和五十七年の第八十三回日本医史学会会長を仰付かってしまった。全くえらいことになってしまった。

私は元来開業医が嫌いで、レールザイテの人間になろうと思っていた。私の妻は女医で昭和十二年から市内で開業していた。所が私の知らぬ間に、昭和十九年の春京都市の

学区の在郷軍人会の分会長にされてしまい（本人の承諾なしに）、数カ月間分会長をした。当時は分会長就任を断つたら、憲兵か、特高がお迎えに来る時代であった。これが原因で、GHQからG項で公職追放ということになり、止むなく教授にすめられて、追放の前に辞表を出して、京都大学講師を辞任した。それで一介の開業医になり、女医の妻と共働きをすることになった。レールザイテにおいて、教授になり、学会の会長を一度はしてみたい夢は無惨につぶれたが、ひょんなことで、第一部会の学会会長になることになった。運命というものはおかしいものである。これで再び大奮闘が始まった。学会運営が如何に大役かはやってみないとわからない。この話をしたら、きりがないので止めるが、一、二の点を申すと、全て京都府医師会のみで学会を企画、運営し、両大学には何らの応援も頼まなかったことである。医学史展、建碑、医学史の編纂のために知らぬ間に府医師会の中に立派な組織が出来ていたわけである。これを「町衆学会」と称した。もう一つは会長講演を「江戸時代における医の倫理のキリスト教の影響」の演題とし、曲直瀬玄朔の延寿院医則十七カ条の中にキリストの影響ありと断定した。阿知波先生よりのテーマを私なりに解釈したのである。特別講演は山田重正先生と宗田一先生にお願いした。とにかく一般に好評であったのはうれしかった。

この医史学の功績により、昭和五十七年十一月一日に日本医師会から最高優功賞を頂戴した。全く瓢箪から駒が出たようなものである。もともと美術好きで、海外へも度々行ったが、医史学をやるようになって、ジャンルがひろく拡大し、イタリアでもパドヴァ大学を訪ね、オランダではライデン大学を訪問するように進歩した。また医史学の多くの良友を全国に持つことが出来た。医史学をやっている人は温かく、人間味があり、考え方が深く、立体的である。

昨今は私の興味は美術よりも哲学や宗教である。殊に「医の倫理」を医史的に眺めるようになったことは、偶然のことではあったが、私の終生の大収穫と感謝している。系譜調査や古文書読みは出来もしないし、性に合わないが、医師として、医史学は私の人生をこよなく豊かにしてくれた。